

令和元年度

第2回釜利谷協議会（11月2日開催）

議事録

<出席者> (委員) 県立保健福祉大学教授 小林 正稔
釜利谷連合自治会長 小泉 啓治
PTA 会長 前田 淑美
(学校) 校長 會田 勉
教頭 松野 明
総括教諭 近藤 純子

進行：近藤

1. 釜高祭（文化祭）の見学

- ・校内を案内し、各団体の展示や生徒の様子を見学していただいた。

2. 協議会

○参加者自己紹介

○協議会

(小泉自治会長)

- ・釜高祭は何回か見させてもらっているが、前よりも落ち着いた雰囲気になってきている。以前はすごい恰好をしている生徒が多かったが、先生方の指導が浸透しているのではないかと。クラスで壁新聞をつくるというような文化的な活動も見られてよかった。

(小林教授)

- ・クリエイティブスクール創設時から見ているので、ようやくここまで来たかという気持ちである。笑顔と明るさが出てきている。昔は廊下で教員と生徒が話をしていると言い合いになっていたが、今は談笑という状況である。以前は写真部の作品がすばらしかったが、今はだいぶ縮小されてしまって残念。指導者がいないと難しいが……。書道の展示をみて、いい指導をしているなどと思った。全体の空間を見て書く場所を決めるというのは、心理的なものやコミュニケーション力に通じるものがある。

様々な小中学校ともかかわりを持っているが、今後も釜利谷のような学校の需要は増えるだろう。地区センターを学校内に入れて、関係を築くというような思い切ったことをしてみてもいいのではないかと。

(近藤)

- ・今回の作品展で、なかなか作品が集まらなかったとき、小泉自治会長の助言で、地

区センターに聞いてみるとよいと言われた。実際に作品の出品者を紹介してもらい、展示することができ大変助かった。地域の力をもっと活用できるとよいと思った。

(教頭)

- ・最近では地域からの苦情も少なくなっている。逆に生徒のいい行動をほめていただくような電話をあり、生徒も喜んでいる。
- ・本校のボランティア団体である「釜利谷サポートチーム」が近隣の小学校へ出向き、活動をするなど積極的な動きも出てきた。校内では、吹奏楽部が地域への演奏会を計画しており、保育園への出前演奏会が実現しそうである。

(小泉自治会長)

- ・人の役に立っていることが、子どもたちを成長させる。ある高齢者施設に毎年小学校3年生の児童が訪問に行くのだが、その日は高齢者が普段よりしっかりするらしい。日頃、施設で面倒を見てもらっている立場なのが、小学生が来るということで、自分たちが面倒を見なければという気持ちになるらしい。
- ・生徒が地域に出ることはとても良い。連携を図る時に地域の社会福祉に携わるケースワーカーや学校のSSWに相談すると個別に連絡をする手間も省けて良いのではないか。

(前田会長)

- ・人に何かをしてあげるといふ、与える側の喜びといふのはとてもよくわかる。保育園に行くといふことは、とても良い活動だと感じる。

(近藤)

- ・サポートチームもボランティアを通して、自己有用感などが育っているのではと思う。一部の生徒にはそのような機会を与えられるが、多くの生徒はなかなか体験させられない。

(小林教授)

- ・「地域開発部」のような部活動を作って、生徒が地域とかかわっていくのもよい。学校を改革していくときに、カリキュラムを中心に考えるのか、生徒を中心に考えるのか、高校教育の目標をどこに置くかによる。生徒のことを中心に考えることがおろそかになっていると思う。教員が失敗を恐れている。人の顔色をみて動くのではなく、とりあえずやってみる。三日坊主でもよい。むしろ短期間にいろいろなことを経験し、自分にあった感覚をみつければよい。子どもたちを信じるのが大切。最初は何をやっても良くなる。最初が一番ひどいのだから・・・

心の成長や感覚は数値では表せない。

○校長より

- ・昨日、釜高祭オープニングで生徒に対して、明日多くの方が釜利谷高校に来てくださる、自分たちから挨拶をして、来てくれたことへの感謝の気持ちを伝えてほしいという話をした。日常の授業はもちろん大切だが、本校においてはこのような学校行事は、教育の場面として極めて重要だと考えている。特に学校外の方と接する機会は、生徒が成長する大切な場面と捉えている。本日の釜利谷協議会では、学校外との連携について、貴重なご意見を多くいただくことができた。いただいたご助言を一つでも実践につなげていきたい。職員会議でも伝えているが、本校は失敗を恐れずにチャレンジを続ける学校でありたいと思う。そういう意味でも、勇気をいただける話を伺えたことを感謝したい。